

「教育を言う前にまず教える中身の開発を」

IDE 現代の高等教育、 524、 高大の連携と接続 2010 年 10 月号、 IDE 大学協会刊を読む

教育を言う前にまず教える中身の開発を

- 1 . 大学改革の目玉として、教育の重視が言われている。シラバスの作成、セメスター制への移行、厳格な成績評価と GPA システムの導入、教育課程の確立と人材像の明確化、FD の強化という具合に、次々と教育重視策が打ち出されてきた、そして、昨今ではそれに、授業実施週の確保が加わった。
- 2 . これは授業を設置基準どおり 15 週、試験や補講期間外に確保せよというお達しなのである。もともとは、アメリカのように学年始期が 9 月で、秋学期が年内に終結して年明けから春学期に入り 5 月の頭には終わるというサイクルのセメスター制を、わが国では学年始期が 4 月であるににもかかわらず導入している。したがって、授業週の確保によって、大学は 7 月末までの授業を強いられることになった。
- 3 . この不合理の解決は、4 月学年始期制を維持する限り、3 学期制(クォーター制)を取る以外にない。しかしそれはさて置き、ここでは、このことにみられる教育重視なるものの中味を問いたい。つまり、教育重視とは、暑い夏に学生をただ教室に座らせておくことなのかということである。一番怖いのは、こんなことで、教育は教育義務を果たしていると勘違いし、学生は学習しているつもりになってしまうことである。本来的な教育の強化は、学生の自己学習を踏まえた上での教室内での教員と学生との間のインターアクティブな授業展開の実現によってのみ果たされる。
- 4 . 問題は、こうした教育重視の意味の取り違えが、ほとんどすべての改革を覆っていることである。教員がこうした形式的な改革を唯々諾々と受け入れているのは、インターアクティブな授業ができない、それに耐えられる中身を持っていないからであろう。文系と称する分野で多々みられる翻訳ベースの評論や、理系に多い狭い視野の研究では、多様なレディネスの学生たちとのインターアクティブな授業で教えるべき中身を生み出すことはできない。現在の改革を象徴する専門職大学院にしても、教えるべき問題解決型の学問の開発を怠り、実務経験者を置けば専門職教育になるという形式的な発想に陥っている限り、本当の意味でのプロフェッショナル教育の確立は望むべくもない。

5 . 教える中身の開発、つまり研究とされるものの内実の改革なくして、教育の改革などありえない。その意味でのみ、大学において研究と教育は不可分のものであり、教員はそのことをなりふり構わず主張し、実践すべきなのである。

P48

[コメント]

その通りだと思う。ならば、大学教員の評価に授業で用いる教科書、問題集、資料集などの著作や編集などを大幅に加えるべきではないか。

大学教員は論文の数だけで評価されていて、授業用の教科書や問題集、資料集などの作成が全く評価の対象になっていないのは大問題と言える。

- 2010年10月3日林 明夫記 -